

# アメリカの東南アジア研究

——インドネシア研究を中心として——

## I はじめに

昨年4月から11月までフォード財団の在外研究員として渡米する機会を与えられた。この7カ月間に夏季の2カ月はオランダで研究テーマに必要な資料収集と関係者とのインタビューを行なった以外、アメリカ東海岸のイエール大学とコーネル大学において、インドネシアにおける伝統的支配者がオランダの植民地であったころから、今日のスカルノ体制にいたるまでの間に、どのようにかれらの権力構造が変動を示したかという問題を中心として、Nation-Stateの形成過程にあるインドネシアにおける最大の課題である「多様ななかの統一」(Binneka Tunggal Ika)、すなわち、国民的統合の完成を阻止している伝統的要素の変容の問題を追求する研究を行ってきた。

そこで滞米中に訪問したインドネシア研究を行なっている大学、研究者の活動を中心として、東南アジア研究の現状をインドネシア研究に重点をおいて紹介することとする。

## II アメリカの東南アジア研究

インドネシア研究の紹介にはいまに、東南アジア研究全般の状況について概観を試みたい。東南アジア研究が今日のように盛んになるについては、いくつかの原因がある。その一つは第2次大戦から戦後経営の時期における政治戦略の必要から発生した地域研究の成立があげられる。地域研究は政治戦略のための手段として発生したところからその内容が非常に pragmatic な性格を帯びている。この点が同じアジア研究の一部である日本研究、中国研究と異なるところである。アメリカの東南アジア研究者が異口同音に話すように、いままでの東南アジア研究には歴史的研究がなかった。それは戦略に直接関係がなかったからであるという言葉はこの間の事情を物語っている。日本研究、中国研究の場合、戦前から既に長い研究史があり、歴史的研究が他の社会科学的研究に劣らない比重を占め、多くの業績のあることは衆知のとおりである。

しかし、東南アジア研究も戦後20年の発達史を背景として、戦争のための戦略からの必要よりは、最近の複雑な政治現象に対処するに必要な、より高度の戦略の必要と学問的な関心とが大きな比重をもつようになり、その歴史的背景と歴史的必然性を追求するために歴史研究がとりあげられるようになり、大学にも東南アジア史研究が講座として設けられるにいたったのである。

東南アジア研究の一般的な状況としてあげなければならないことは、東南アジア全般をとらえる概論的研究か country study に基づく一国の研究かということに、今後のアメリカの東南アジア研究の方向をめぐらる問題がある。地域研究が本来 country studies を基礎として発展した関係から、今日まで東南アジア史研究が発展しにくかったという問題が、アメリカのこの部門の発展をおくらせたいま一つの原因であるということができよう。

今日、予想外に多くの大学で東南アジア史の講座が設けられている。しかしその担当者を見ると、歴史学の出身者よりは、政治学、社会学の出身者が多いのである。しかもかれらは大学院博士課題修了まではこれらの学科の country study をテーマとしていた人たちで、むしろその面において、すぐれた業績をもっている人たちであり、東南アジア史は職業としての教育者としての立場からこれを担当しているということが出来る。例をあげると、イエール大学の東南アジア史を担当しているH・J・Bendaは、コーネル大学でPh. D.をうけたときの論文テーマは、1943～45年のインドネシアにおける日本軍政の回教政策であった。しかし、かれがロッチェスター大学からイエール大学に移ってから大学と大学院における講座は東南アジア史が担当である。かれの大学院におけるセミナーは1963/64年度は主として、東南アジアの教育の発展を中心とした社会史に重点がおかれ、またかれの1964年度のアジア研究学会 (Association of Asian Studies) の大会での発表論文は東南アジアにおける農民運動の先駆的形態についての比較研究であった。

このように、教育の場における概論的講義がしだいに増加する傾向がある。しかし、これは country study が減少してきたことを意味するものではない。むしろ講座

の枠が増加したこと、さらには、地域研究が政治戦略のためのものではなく、学問的研究に発展しつつあることを意味する。

この傾向はアメリカのほとんどの大学にみられる。またこれは大学の東南アジア研究と研究機関の東南アジア研究との方向の差という問題でもある。

政治、経済、社会および人類学の諸学においても同様なことがいえる。これらの諸学における大学の講座が東南アジアの政治論であり、経済論であり、社会論であり、人類学論であるが、その担当者の専門科目は country study である。この点がわが国の東南アジア研究と非常に異なる点ではないであろうか。わが国では概論が先行する傾向があり、一国研究の成果をふまえたものでないところに相違を見いだす。これが東南アジアの比較研究において、両者の成果として強く現われているのではないであろうか。

### III アメリカの東南アジア研究の問題点

正確には問題点というべきかどうか疑問があるが、わたくしがアメリカの東南アジア研究者との話合いの間に感じた問題がある。それは東南アジア(註1)といわれる地域を形成する国が8カ国にのぼり、それぞれが政治的・経済的な背景を異にするばかりでなく、社会構造、言語の面においても異なった要素を包含していることによるものである。このために、わが国におけるような概論的研究のための概論研究が主体となっている東南アジア研究と異なる問題が生まれる。わが国の場合はこの広大な地域における共通要素と差異要素を最大公約数によって抽象化してしまうことによって東南アジアを浮彫りにさせる傾向がある。これはイギリスの東南アジア研究の影響と思われるが、わが国の東南アジア研究の一般的な傾向であろう。

これに対して、アメリカの場合、発生が地域研究にあったことから country study が前提となっている。その態度から共通要素を求めることよりも、一国の特殊条件を重視することになる。したがって、政治学、社会学、文化人類学の立場からの概論に、各国の特殊条件と特殊問題が濃厚に包含されることが多いといえることができる。

いま一つの問題は、東南アジアの8カ国を研究する場合、各国についての各専門分野の学者を集めることは、アメリカといえども容易ではないということである。したがって、地域的に講座がかたよる傾向がみのがせない。

大きな陣容をほこるイエール大学の東南アジア研究についてみると、つぎのような講座の分担になっている。

#### 人 類 学

*Mr. Kwang-Chih Chang*

Ethnography and Cultural History of Southeast Asia.

*Mr. Harold C. Conklin*

Problems of Southeast Asian Language and Culture.

Problems of Malaysian Ethnology.

*Mr. Leopold J. Pospisil*

Ethnology of Papua and Australia.

#### 経 済 学

*Mr. Reginald H. Green*

Economic Development of Southeast Asia.

#### 地 理

*Mr. Karl J. Pelzer*

Geography of Southeast Asia.

Seminar on Southeast Asia.

#### 歴 史

*Mr. Harry J. Benda*

The History of Southeast Asia Since 1500.

Problems in the History of Modern Southeast Asia.

#### 美 術 史

*Mr. Nelson I. Wu and Mr. Kiyohito Munakata*

The Art of Eastern and Southern Asia.

#### 政 治 学

*Mr. Carl H. Landé*

Political Development of Southeast Asia.

*Mr. David N. Rowe*

Problems in the International Relations of East Asia, Southeast Asia, and the Pacific.

The Governments and Politics of East, Southeast, and South Asia.

#### 東南アジア

*Mr. Paul Mus*

Brahmanism and Buddhism: The Background of Indian Thought.

Indian and Chinese Cultural Influences in Southeast Asia.

Indian Art: Its Philosophy and Political Influence in Southeast Asia.

Setting and Patterns of Indochinese Peasant Life.

研究機関紹介

東南アジアの言語・文学講座

Burmese.

*Institute of Far Eastern Languages.*

Elementary Burmese.

Intermediate Burmese.

*Mr. William S. Cornyn*

Advanced Burmese.

Structure of the Burmese Language.

Burmese Historical Grammar.

History of Burmese Literature.

Indonesian.

*Institute of Far Eastern Languages.*

Elementary Indonesian (Malay)

Intermediate Indonesian (Malay)

*Mr. Isidore Dyen*

Advanced Indonesian (Malay)

Structure of the Indonesian Language.

Tagalog.

*Institute of Far Eastern Languages.*

Elementary Tagalog.

Intermediate Tagalog.

*Mr. Isidore Dyen*

Advanced Tagalog.

Structure of the Tagalog Language.

Malayopolynesian.

*Mr. Isidore Dyen*

Comparative Grammar of Malayopolynesian Languages.

Seminar in Malayopolynesian Linguistics.

Thai.

*Institute of Far Eastern Languages.*

Elementary Thai.

Intermediate Thai.

*Mr. Samuel E. Martin*

Advanced Thai.

Vietnamese.

*Institute of Far Eastern Languages.*

Elementary Vietnamese.

Intermediate Vietnamese.

*Mr. Huynh Sanh Thong*

Advanced Vietnamese.

Vietnamese Composition.

Introduction to Vietnamese Literature.

これらの講座は M. A. の講座であって、Ph. D. の講座はおかれていない。Ph. D. の講座は国際関係論の講

座のなかで分科している。

上述の M. A. 講座のなかの担当をみると、ほとんどが東南アジア全般を対象としているが、教授はそれぞれ専攻の地域をもっている。

Harold C. Conklin はフィリピン of 社会人類学, Karl J. Pelzer はインドネシアおよびマレーシアの地理学, Hary J. Benda はインドネシアの現代史, Carl H. Landé はフィリピンの政治学なのである。

同様なことは他の大学にもある。いま一つの例として 1964年度から新設された、ミシガン大学の Center for South and Southeast Asian Studies の講座についてみると、

- |                             |       |                                    |
|-----------------------------|-------|------------------------------------|
| (1) L. A. Peter Gosling     | 地 理   | Malaysia                           |
| (2) Antonin Basch           | 経 済 学 | India                              |
| (3) Alton L. Becker         | 言 語 学 | Burmese                            |
| (4) J. H. Broomfield        | 歴 史   | India                              |
| (5) Robbins Burling         | 人 類 学 | Assam, Burma                       |
| (6) O. L. Chavarría-Aguilar | 言 語 学 | India-Sanskrit, Hindi-Urdu, Pashto |
| (7) Russel H. Fifield       | 政 治 学 | Philippines                        |
| (8) William J. Gedney       | 言 語 学 | Thai                               |
| (9) John P. Haithecox       | 政 治 学 | India                              |
| (10) Ferrel Heady           | 政 治 学 | Philippines                        |
| (11) Rhoads Murphey         | 地 理   | Ceylon                             |
| (12) David Steinberg        | 歴 史   | Philippines                        |
| (13) Alan M. Stevens        | 言 語 学 | Indonesian                         |
| (14) Richard S. Wheeler     | 政 治 学 | Pakistan                           |
| (15) Aram A. Yengoyan       | 人 類 学 | Philippines                        |

といった陣容であって、インド、マレーシア、フィリピン専攻の学者が多く、やはり重点はこれらの地域におかれている。

イェール、ミシガンの両大学の教授陣にみられるように、東南アジア全地域をことごとくカバーすることは不可能であって、必然的に重点をおく対象国が限定されてくる。さらに同一分野について多くの教授陣を擁することができないという問題がある。これが学内での研究を共同化できないようにしている。

共同研究の盛んなこの国において、1大学において共同研究ができない欠点を全国的規模の Association of Asian Studies の共同研究組織が補っている。この Association が今日の東南アジア研究の展開に非常に大きな役割をもっていることに注目しなければならない。

この学会の活動については、板垣教授が『欧米の東南アジア研究』（アジア経済研究シリーズ12）のなかで1958年、1959年、1960年の活動について、相良、猪木、岩村の3教授が1962年、1963年、1964年の年次総会について『東南アジア研究』第4号（東南アジア研究センター、1964）に報告しておられるので、割愛するが、アメリカのアジア研究者の共通の場としての意義が非常に大きいことを述べておく。

（注1）東南アジアとわたくしが定義する地域は、インド、パキスタン、セイロンの南アジアといわれる地域を除外して考えている。

#### IV アメリカのインドネシア研究

以上で、概観的に東南アジア研究について述べたが、以下において、その一環を構成するインドネシア研究について述べることにする。

現在のアメリカのインドネシア研究の水準を一応示すものとしてあげることのできるのは、1963年に刊行された、Ruth T. McVey 編の *Indonesia* であろう。この本は、現在のアメリカのインドネシア研究の第一線にある権威と新進の論文をまとめたものである。執筆者とその論題をあげると、

Karl J. Pelzer, Physical and Human Resource Patterns.

Hildred Geertz, Indonesian Cultures and Communities.

G. William Skinner, The Chinese Minority.

Karl J. Pelzer, The Agricultural Foundation.

Everett D. Hawkins, Labor in Transition.

Robert van Niel, The Course of Indonesian History.  
Herbert Feith, Dynamics of Guided Democracy.  
Anthony H. Johns, Genesis of a Modern Literature.  
Mantle Hood, The Enduring Tradition: Music and Theater in Java and Bali.

の8人の学者が名をつらねている。Feith は現在オーストラリアのモナシュ大学の Senior Lecturer であるが、コーネル大学で Ph. D. を得るまでの数年間を勉強した人で、オーストラリア人ではあるが、アメリカ流の研究態度を十分に身につけている人である。この人を除いて他の人たちはアメリカのインドネシア研究の長老あるいは新進の学者である。さらにこの本が完成するまでに、助言と批判を行なった人たちがさらにインドネシア研究の第一線の人たちであった。この人たちの氏名と専門分野をあげておく。

Benedict R. O'G. Anderson, Cornell Univ. (政治学)

Harry J. Benda, Yale Univ. (歴史)

John M. Echols, Cornell Univ. (文学, 言語)

Clifford Geertz, Univ. of Chicago (文化, 社会)

Bruce Glassburner, Univ. of California, Davis (政治)

Benjamin Higgins, Univ. of Texas (経済)

Donald Hindley, Brandeis Univ. (政治)

George McT. Kahin, Cornell Univ. (政治)

Daniel S. Lev, Cornell Univ. (政治)

David Mozingo, Univ. of California (華僑)

Ann R. Willner, Yale Univ. (文化, 社会)

これらの人は Cornell Univ. の Dr Anderson と Dr. Lev を除いて、既にアメリカで著名なインドネシア研究の学者である。もちろん編者である Ruth T. McVey を逸するわけにはゆかない。かの女はインドネシア共産党史の研究家として著名である。コーネル大学を卒業して、現在はマサチューセッツ工科大学の国際研究センターに所属している。

これらの人たちの名をあげたのは、インドネシア研究がかなり幅と興行において大きいことを示してみたわけである。

これらの人たちの顔ぶれから、気がつくことはコーネル大学出身者が比較的多いことである。事実、この大学の地域研究、ことにアジア研究に対する重点のおきかたは他の大学に比べると、非常に大きいといえる。それは、コーネル大学の地域研究の歴史によるもの

## 研究機関紹介

でもある。インドネシア研究について述べるまえに、その概要を述べておく。1870年に中国語のコースがおかれたのがはじまりで1946年に文理学部 (College of Arts and Science) にアジア研究学科 (Department of Asian Studies) がおかれるにいたった。アジア研究学科は中国 program, 南アジア program および東南アジア program に分かれている。

東南アジア program は1950年に独立したもので歴史的には他の 2 program よりは若い。しかし、その業績はタイ、インドネシアを中心として注目すべきものがあることは衆知のとおりである。

インドネシア研究はこの program の一環として存在し、現代インドネシア問題に集中して研究を行なっている。したがってその名称も Modern Indonesia Project と呼んでいる。この Project はアメリカのインドネシア研究の第一人者である George McT. Kahin 教授が委員長であって、3階建の建坪200坪の研究室をもち、委員長以下、Ph. D. 論文執筆中の大学院博士課程在学の助手、学生百余名がそれぞれ一室に1名ないし2名ずつ陣どって、論文執筆に努力を傾けている。この研究室ができてから輩出しているインドネシア研究に専念する若い学者の数はまことに多い。前述の HRAF (Human Relations Area Files) 刊行の *Indonesia* 編さんの McVey 女史もその一人であり、助言をした人たちのなかでイエール大学の Benda がそうである。そして前述の列記したコーネル大学在籍者のほかに、卒業生として、既に教職にある Robert Van Niel (ラッセル・サガ・カレッジ)、John Smail (ウィスコンシン大学)、Robert C. Bone、John O. Sutter、Paul W. J. van der Veur、Donald E. Willmott 等が Ph. D. をうけている。なおコーネル大学で1962年までに M. A. をうけたものは二十数名といわれている。

他の大学におけるインドネシア研究をみると、まず、イエール大学は、ジャワで不慮の死をとげた Raymond Kennedy と John F. Embree が基礎をきざした。1947年にアメリカの最初の東南アジア地域研究センターとなって以来、インドネシア研究に多くの学者を送り出したが、両教授を失ってから一時停滞的であったが、Pelzer 教授によって再建され、Benda を迎え、最近はふたたび優秀な若手を送り出しはじめた。Frank L. Cooley の Ambon 人の Adat (慣習) の研究、R. William Liddle のインドネシアの政治発展における地方エリートとグループの研究のような注目すべきものがある。

西海岸におけるインドネシア研究のセンターであるカリフォルニア大学 (パークレイ) もまた多くの学者を送りだしている。この大学はインドネシア大学との間に援助協定があって、カリフォルニアからは教授を派遣し、インドネシア大学は大学院学生を毎年派遣している関係をもっている。したがってカリフォルニア大学の教授たちはインドネシア大学において教育を行ないながら資料収集と現地調査のめぐまれた機会をもち、すぐれた業績を発表している。政治学では Guy J. Pauker、Joseph Fischer がいる。現在ウィスコンシン大学で経済学を講義している Hans Schmidt がここの出身で、かれはインドネシアにおける社会的紛争の金融財政への影響と題する1950年から1958年のインドネシア経済の分析によって Ph. D. をうけた。そのほか、外交史で Mariet-Jose Cadoret が1950年以後の米伊関係によって Ph. D. をうけている。

その他の大学ではテキサスにインドネシア経済研究の Benjamin Higgins、ブリジポート大学に多作で有名な Justus M. van der Kroef、ブラウン大学に華僑研究の Lea E. Williams、デーヴィスのカリフォルニア大学にインドネシア経済研究の Bruce Glassburner がいる。

最後に、わたくしは訪問する機会を得られなかったシカゴ大学の社会人類学のグループのインドネシア研究である。それは *Religion of Java* との題目のもとにジャワの回教の社会人類学的研究において新しい仮説を設定し、それが政治学において広く用いられた分析方法を展開した Clifford Geertz の研究である。かれはハーバート大学において *Religion in Modjokuto: A Study of Ritual and Belief in a Complex Society* という論題の Ph. D. 論文を提出した。かれのこの Ph. D. 論文が前述のジャワの宗教である。かれはこの論文を書くために、夫人の Hildred S. Clifford、Alice E. Dewey、Robert R. Jay の諸氏とともに2カ年の中部ジャワの実態調査を行ない、いくつかのすぐれた論文を発表した。かれの研究はアメリカのインドネシア研究を従来の段階から一歩前進させたということができよう。かれはさらにバリの村落についての業績もある。最近の業績としては、*Peddler and Prince* と *Agricultural Involution* を1962、1963年と相ついで発表している。

Robert R. Jay は現在ハワイ大学にいますが、かれの労作 *Religion and Politics in Rural Center Java* を発表している。

## V アメリカにおける東南アジア語学研究

アメリカの地域研究に重要な役割を果たすのが言語教育である。プラグマティックな方法論をとる東南アジア研究の場合、country studyの手段としての当該国の言語の修得が非常に重要なものと考えられている。したがって、各大学の東南アジアセンターには必ず充実した語学コースがある。さらに注目しなければならないことは、1958年に成立した国防教育法 (National Defence Education Act) によって連邦政府が語学研究に補助金を支出していることである。

小生が訪問したイエール大学とコーネル大学の東南アジア関係の語学コースをあげると、イエール大学ではビルマ語、インドネシア語、タガログ語、タイ語、ベトナム語の5コース、コーネル大学ではビルマ語、インドネシア語、ジャワ語、メイ語、ベトナム語の5コースである。

イエール大学のインドネシア語は Isidore Dyen、コーネル大学では John M. Echols が主任教授である。

機会があったら、語学教育について、まとめてみたいと考えているので、この報告ではこの程度にとどめておく。しかし、夏季の2カ月に開講されるインテンシブ・コースは朝8時ごろから夕方5時ごろまでのハード・トレーニングで、この2カ月の間に初歩の会話、講義、作文の能力がきたえあげられることだけつけ加える。

## VI おわりに

アメリカの東南アジア研究の内容について報告したいと考えていた意図とは反対に研究の現状の紹介に終わってしまった。

しかし、アメリカの東南アジア研究は現実の国家の政策と深い関連をもちながら展開されているのであって、学者個人の学問的興味だけではないことをみたのであった。しかもこれらの研究が、国と財団の援助のもとに、常に新しい事態に即応して展開していることである。地域研究に歴史研究の背景が必要となれば、その講座は国あるいは財団の援助で設けられる。

しかし、わが国もアジアへの関心が高まったといいながら、大学に東南アジア史の講座すらないのである。このことは、国が東南アジアの調査研究に期待しているものとの間に矛盾を感じるのである。

調査研究はアメリカにおいても大学以外の機関でも行

なわれている。そこにおける調査研究も単なる survey を目的としたものではない。もちろんその研究機関は、その設立の目的によって組織と研究の対象を設定している。したがってこれに参加する学者は自分の研究テーマとの関連を広く解釈して、できるかぎりの協力を行なっている。しかし、この種の研究機関では研究される問題が展望の意味をもつものであることが多い。一つの例をあげると Rand Corporation で Dr. G. Pauker がインドネシアにおける共産主義政党の今後の展望を行なっているのなどその良き例であろう。もちろん、基本的な問題への追求も第一義的に行なわれていることはいうまでもない。

アメリカとわが国の地域研究のあり方を比較するとき、なおその両者の大きな懸隔をみる。これは、基本的には、大学における地域研究に対する態度の差であることを痛感する。大学における地域研究者の養成のいかんは、研究機関におけるスタッフの充実と直接的な影響をもつことはいうまでもない。アメリカにおいては、学士課程4カ年の理論研究の上に地域研究を修士課題、博士課題の5カ年を通じて完成させてゆくのである。そして2カ年の博士論文を前提とした現地調査とその後の博士論文の完成によって、一人前の地域研究者は完成するのである。大学におけるこの長い期間の研究によって社会人として、教職あるいは研究職につくときはすでに新進の学者としての発言と行動が可能となっているのである。

(調査研究部専門調査員 岸 幸一)